

昔話についての手控え数件

——西行話・たとへづくし・その他——

太田東雄

一 「西行話」について

昨五十五年に地元の山陽新聞から刊行された『岡山県大百科事典』の口承文芸部門で、私は「西行話」の項目を担当したが、事典としての制約から摘要にとどまっていた。誌面を頂いたのを幸いに、その折りに利用した資料も示し、やや詳しく補説させて頂く。一段下げて字を小さくしたのが、その旧記事の一節である。

西行話　さいぎょうばなし　歌人西行法師を主人公とする一

種の狂歌咄。〔日本昔話集成〕に登載されている二型のうち、岡山県では「西行と女」の類が採集された。旅の途中の西行が野薺をすると、たまたま萩の上だったので枝がはねたのをへ西行はいくたの旅をしてみたが、萩のはね薺これぞ見はじめ」と歌う「萩のはね薺」は古川柳にも詠まれていて、かなり流行した話であつたらしい。

「日本昔話集成」（あと「集成」と略称する）の後身の

『日本昔話大成』によると、本話型が^(母)南から宮崎・福岡・愛媛・香川・山口・広島・島根・鳥取・和歌山・兵庫・京都・滋賀・岐阜・福井・新潟・神奈川・群馬・山形（最近の報告によると長野・宮城も加わった）の各府県にまだがつていることが知れる。

まず「萩のはね薺」の話柄について岡山県での事例を紹介する。

「（原題・西行のはぎのはね薺）

苦田郡阿波村大畑湯谷・女

西行さんが旅ゆうしられる時になあ、うね越しでしうなあ、お便所へ行きとうなつて、せえで行かれる時に、どうもどこへ行こうなあけえ、せえで野にしられたんでしう。その時にはさを踏んどられたのが、立てられるおりに

はねて、せえで、「西行もいくらの旅もしたけれど、はぎ

のはね蓑これぞ見始め」言うて通られた。(阿波P.48)】

『日本昔話通観』(同朋舎)第十九巻P.635から引用した。

なお、類話にある歌はいずれも下の句共通で、

・西行はいかなる旅もしてみたが……

(勝田郡奈義町)

・西行はいくたの旅もしてみたが……

(苦田郡阿波村大高下)

である。川柳との関連で当話型が論じられたとは管見にな

いので記事にしたのであるが、たとえば『日本史伝川柳狂

句』(近年、古典文庫で復刻)に、

「A、萩で跳ね」「西行はいかなる旅もして見たが萩のはねくそ今が見初め」旅にて萩の枝を踏み、其上に用を足したるところ、「了れて退けば枝が跳ねて、因つて此吟あり

と、

西行は名高ひ戻を一度たれ 四三・二四ウ

古今の戻に名の高い戻の哥 一五一・一四ウ

萩の戻集の中へはねこまず 一一八・八オ

此所西行無用萩の巻 八四・二一ウ

……萩の寺 一四〇・二ウ

萩寺へ来て西行の物語 六一・一〇オ

夏枯の草に西行首をたれ 弘二・佃二七ウ」

(古典文庫第三六四冊P. 167~168)
とある。(注2)

短詩型であることの制約からして、川柳の句柄には世上既知の話題を要約してはめこんで、言葉の捻りを加えて提供するという例が多いので、この各句もその類と見れば、昔話「萩のはね蓑」あるいはその原態の話柄の流通した時期が近くともこの句群の年次以前(注3)文化四年以前)に遡る、と判断してよからう。

またそれが龟(あるいは蟹)の上に立ったので、動きだした龟を見て「西行もいくらの旅もしてみたに蓑のほうたはこれぞ見はじめ」と歌い、龟が歌い返す「西行と龜」。この話柄は下がかつた話なのでひとりの話(最後の話)とされ、さらに続けて他の話をしないこともある。

これも岡山県での事例について見ることにする。

「(原題・弘法大師と龜)

阿哲郡哲西町川南・女

昔、あるところを、弘法大師さんが通りようちやつたんじゃそうな。そうしたら、便所をもよおして、道の下あ降りて、まあ用事ゅうすまで、逃げちゃつたんじゃそうな。逃げてから後へ向いて見りやあ、おんごり、おんごり歩きようるげな。まあ、こんなあえらいことじゃのう思うて、「長年、長年旅ゆうするけれど、生蓑ひつたはこれ始め」

いうて、弘法さんが歌あ詠んじゃつたいうて。そうしたら

下の方で、「長年道下に住むけど、駄賃取らずの重荷負いをしたのは、これ始め」というて、詠み返やあたいうて。へえから、なんじやろうかのう思つて、ようかこんで見たら、

龜じやつたいうて、それから糞臭うなつたんじやと、龜が。

昔どつぶり。(中國山地P. 375)

注(1) この話は「とり(最後)の話」といひ、これでその話はしまいとする。下の話(色話も含まれる)をすると、話が終わつたということになる。(2) 文中には「弘法大師」とあるが話題名は他に合わせて「西行話」とする。」

前項と同じく『日本昔話通観』P. 634から引用した。この(1)の注記に関しては、当該書の編集代表たる稻田浩二氏の(注(5))論説がある。

風流な萩に比べて、龜の話題では江戸人士の嗜好に合わなかつたか、対応句は見当らぬようである。歌での応酬といふ重い形式を擱いて考えるなら、「萩のはね糞」あるいは伝説の「西行石」あたりから派生したものであろうか、とも思う。

洗濯女に歌いかける文字通りの「西行と女」も一例採集されている。なお『昔話集成』に登載された(仮の宿を借しむ君かな)と歌う話は『選集抄』・謡曲「江口」で流布したものであるが、前記したような昔話群の、それより数等穏当な

り、各種の俗曲にも歌われている。

「俗曲」としたのは、長唄・河東節・木やり歌の類である。西行が「川にいる」女に歌いかける「西行と女」の例話を次に示す。

「西行法師の歌(後半)

せえから、また、むこうへ、むこうへ行きょうたら、娘とやら嫁さんとやらが、洗濯うしようて、その尻う出いてしょうたで、その坊さんが通りようと思うて、杓の庭の抜けたのを、ぱつと尻い伏せたんじやそくな。そうしたところが、尻が見えたんじや。

西行もいくらの旅もしてみたに、ぼほの蒸し器こしきは、これぞ見初め、いうて、歌あうとうた。語り手・勝田郡勝田町赤坂 宇野いち

『美作の昔話』(日本放送出版協会刊)P.152から引いた。

この話柄から想起するのは(伝説的な付隨部分も多い西行については別として、俳聖の雅棲を下世話に扱うと叱責ものであるが)『野ざらし紀行』中の「西行谷のふもとに流あり。をなんどもの芋あらふを見るに、

いもあらふ女西行ならば歌よまん(大系本)』である。遊女江口との攝州での歌の贈答と結んだ解釈が定説のようであるが、前記したような昔話群の、それより数等穏当な

祖型的な狂歌話は句吟當時流布していなかつただらうか、

と俳句については門外漢である私は夢想する。例えば、島

「(原題・西行の歌くらぐ、梗概)の部分

根岸(?)が谷川で菜を洗つて「十一」、三歳の娘が自分をじつと見ているのに気づき、「十二」や三の娘が、恋路の道を知ることはなるま」と詠むと、娘は「おおそれや谷あいのつじ橋を御覧ない、せいか小さいが花は咲きます」と詠み返す。(中略)こうして西行はいたるところで歌に負けたという。(匹見P.229)

島根県美濃郡匹見町下道川・男(『日本昔話通観』第十八巻 P.545)

のよくな。また「富士見西行」の話題は、当時どうであつたか、と回じく「野やらし紀行」の富士の句を見て興味を持つ。

昔話から照射した西行は、至極、親しめる人柄である。

西行につづての庶民の感想は例えば、

「眼に上手じや小唄に上手／むかし西行の後裔^{ながれ}かや

むかし西行のながれじやないが／むかし西行の宿をした

(庭歌一員弁・蘿野)

富士の裾ので西行さんがひるね／なにを枕に／田古の浦
(庭歌一度会・鶴倉)

という歌に示されているようなものでもあつたろう。

以上で岡山県に見られる「西行話」(のその一半である「西行と女」)の諸形の紹介を了えたが、念のため、「江戸」の話題をとり入れた昔話を紹介しておく。集成では同じく「西行と女」に収合されている。

「(五二八 西行と女)

岐阜県・大野郡——(註)西行が汚いなりで門口に立つて雨宿をこう。女が早く行けといふので「世の中をいとうまでこそかたからめ仮の宿を惜しむ君かな」と詠むと、女は笑顔になつて泊める。(丹生川・一二六番)

『日本昔話大成』第九巻P.292

また、この例話と並べてある、西行が鼓ヶ岳に登つて、「名も高き鼓ヶ岳に来てみれば西も東もたんばほの花」とまず詠み、他人からの示唆を受けて初句の「名も高き」を鼓と呼応する「音に聞く」に、三句の「来てみれば」を「うち見れば」に修整する話柄は近世にてもはやされたものらしく、これも川柳に数多く詠まれている。

以上、かなりくどく並べた各話柄をどのように整理しての意見はここではさし控えておく。

注1 横田道二氏より、主人公は西行であると名は挙げないが、類する話が沖縄にも多く、現地では演劇にて流布したものようであるとの御指摘を頂いた。

注2 各句の下の記号は「四三・二四ウ」とあれば、「誹風柳多留四十三篇二十四丁裏」、「弘一・佃」は

「弘化二年佃評万句合」の表示である。

注3 『柳多留』四十三篇は序文によると、文化四年春に開催された二代川柳の住居新築祝賀の句会での入選

句が掲載されていることになっている。

なお、篇中二十二丁表に

はねる子を海老にして乳母犬をよび

の句があつた。昔話「犬鉢入」と関連する習慣を示した句である。「海老にして」とは抱えて、これから用便させるのである。犬はその始末をするのであらう。

注4 一休と西行と弘法大師、太子と大師、伝教大師と弘法大師、それぞれの間で時に話柄の重複が見られる。またこのような話柄には、無名の人を主人公にしようとする傾向（昔話的ともいおうか）と、逆に、より著名な人に仮託されようとする傾向とが見られる。

注5 「『とりの話』小考」伝承文学研究第十一号

注6 『続丹生川昔話集』を出典として同地の殆んど同形態の話が『日本昔話通観』第十三巻の「狂歌の手柄」

の項へ類話として載っている。旅をして来た西行と長者との応対になつてゐる。

注7 「雖も鳴かねば うだれもすまい 父は流の人社」（南牟婁・南輪内）の歌も載つてゐる→二参照

二 『たとへづくし』から

（昨五十四年十一月に活字化刊行された松葉軒東井編・宗政五十緒校『たとへづくし』（同朋舎）は「天明六年成立の江戸期のことわざ・慣用句大辞典」であるが、昔話に関する慣用句も豊富に含んでいて、有難い出版物である。既にいくつかの話題が紹介されているらしいが、ここに口承文芸との関連上重要と思える詞章を悉意に選んで抽出しておくる。

「」内は引用であり、上の数字は活字本の頁を示す。便宜上、小字部分を（）内にまわした。引用の部分省略をし、特にふり仮名はかなり省略した。

その外にあるのは私注であるが、昔話の話題名については仮りに『日本昔話事典』（弘文堂）の項目名を利用し、「」で示した。「」は『日本昔話通観』の題名を利用したものである。

29へ一把の薬を十六把になす人を婿に取らんといふ大百姓

あり 或人往てより這入て庭あり向に鍼ありお婆の顔に
皺あり(以上合十六把)「一一把の糸十六把」
48(持着て小用が出来まひ(勝の笠)そんなら小用仕なが
ら足袋の紐が成か)小咄

49・52(語)は庚申の晩

75(嘯の瓶)へ聞かずば浮世は僅よ(カツタリ。カツタ
リ——カツタリ)米春一村(サテハ鼠の籠里ト知

猫ノ真似スレハタチマチキニウセヌト』風浪士

79・87(蜀魂は迷途の鳥(夏中千瓶鳴ト』)

85(時鳥は本尊掛たか(ト』)忍者は初音(ヲ』)……

86(ほととぎすは夏中に八千八声鳴といへり千瓶ともいふ
(然トモ昔モ今モ聞人希也)以上三項『時鳥と呪歌』

はか

89(転失氣尻聲める)落語

92(虎狼より漏るぞ懼ろし)古屋の漏り

153(枯たる木にも花咲く)『花咲館』

170(蛙の歌よむこと住吉の浦のみるめも忘ねねば仮にも
人に又問られけり(女ニ化シ契尋行シ蛙ノ足趾如此)』

「蛙女房」

180(怨引張れば股劈ける)

180(慾の角鷹)以上二項『鷹鷹は鳥の王』

197(因子ほど張た)『因子聲』?

201(狸の翠丸ハ豈敷ひろがる)『狸の八昼夜』

207(大太坊だいたぼうだいた法師ト』) (田向塙田ノ大夫ノ女大
蛇ト接シテ男子ヲ産 大太童ト云教童トモ』……)

「蛇と女」

209(鮑木に上る藤の棚)「瓶くらぐ」

214(曾田利疋しにこある(……鞆師ナリ)

223(壺じや(從)堺宿院田ル語也或人壺ヲ一ツ買ヒ
代錢百穴渡ス……)』落語「壺算」

231(鼠の壻の談合にて(「風の嫁入り」?

259(馬の望欲れたるは其女の内衣を弛さし直に馬の頭を

可レ復^{みれ}馬娘婚姻譚?鏡花『高野聖』を想起

262(無腹國に米沢彦八渡らば国人等大に迷惑せん抱へる

腹無故。小咄・落語

273(魚も喰はれて成仏す)一休帖

359(衆の啼に晴雨の示あり(乃利須利於介ト鳴ハ晴天
乃利止里於介ト鳴ハ雨)』『梟紺屋』

380(五人面々理屈と/oru う咄あり 客四人儲く床の一軸絵
讚あり評じていはく「賛といふあり」「これは詩な
りと……亭主出て 是元質のながれもの』小咄

468(座頭餅屋にて錢払ふ三人一人宛いへるは此家は三ツ
食ふた 又一人曰四ツ食ふた 又一人曰五ツ食ふたもの
やと(「座頭振舞」見つくるた・ようつくろつた・何

田へくらひだ

482・485 「^{あらわ}はじ父は長柄の人柱雉も鳴すは打たれまじむをへ」「長柄の人柱」

496 「^{めうが}荷を喰へば物忘れを為(是草天せ)樂持^(アラ)塚より生す故ニ鈍草ト名く」「若荷女房」

504 「味噌豆は三里廻りても喰ふべし」「繼子の釜茹で」

505 「^{みづけ}姫^{みづ}に問^い土喰^{くち}後^さ以^て何可^か食^く仏答^ハ六甲土^{つち}田^たに日^ひに曝^{さら}れ可^か死^し」」「姫^{みづ}と土^{つち}」

530 「娑婆で見た弥次郎かとも思はぬ」小咲

545 「^{アシ}講とて宮境内寺院境内にて小屋の講談トなり」

567 「須弥山を飯にし大海を汁とし虚空を呑めど喉に遙ら

キ(一休和尚) 大話

572 「四枚の鱗でよかれがしと思ふ」「祝^い直^す」

596 「百物語は不^ハ為もの必怪みを招く」

626 「雀は親に孝行鳥親の死際に養着ながら行て遇ひしと燕は女にてお鉄瓶付身嗜し得不^ハ遇と^ハくり」「雀孝^ハ」

257 「昔先箇様の尻は真赤な(昔咲^ハ結語也)」

465 「猿の尻は真赤な(昔咄^ハの結句)」

「日本古典文学全集」月報38に稻田氏の「昔はまつかう」周辺の論が掲載されている。氏は御伽草子「福富長者物語」の結句「昔はまつかう」に着目され、以降の文献

から「傾城八花形」の「昔まつかうさる人の書き伝へたる物語」に到る「まつかう」の用例を述懐されている。そして現代の口承昔話の「昔まとう」系の結語の諸例を示され、中でも「昔まっこ猿まっこ、猿のお尻はまつ赤いしょ」と等の下の話題へ向かっていく傾向と、お開きの合図である「とりの話」との関連をも述べられた。

ところで、それにこの「たとへりくし」の1項田を加えて考えると、稻田氏の推論の二時代を結ぶ中継点に相当するものとして扱えそうである。(「先箇様」と当時の意味理解も示されている)。さらに「俚言集覽」に紹介されている「猿の尻は真赤な牛房焼をおッつけろ」の詞草を加えてみると、そして「傾城八花形」の用例の力点を振ってみると、そうすると、語呂合わせの興も働いたとして、

福富草子「昔はまつかう」

傾城八花形「昔まっこある人の…」

童謡「猿の尻は真赤な…」

（あるいは）
だとへりくし「猿の尻は真赤な」

だとへりくし「昔まつかう猿の尻は真赤な」
現行「昔まっこ猿まっこ、猿のお尻はまつ赤いしょ」等

とじう系統図が組み立てられそ�である。童謡あるいは…としたのは、童謡から昔話への流れがあつたとも、その逆であつたとも考えられるからである。「『とりの話』小考」に挙げられた結句「どんびん三助猿まなこ、猿のけつわじぼう焼いてぶつつけける」（山形県北村郡）は、前記童謡との関連の強い事例であろう。

292 くね尻くねしり貼はりしが出れば咲の仕舞じやげな）
355 く下子くげすの嘶すいは卑賤ひせんの事にて果たがる）

「とりの話」との関連に注意したい。（注2）以前にも書いたことであるが、咲本『鹿子餅』（明和九年）の巻末に「下司咲果くわいが以い 古語こご」先此卷是切はきとある。

340 へげなと言いへばげるの神様かみさま叱むならしやるげな）「げなげな話は…」の類であるか。

注1 この詞章は見出しなつて、シト「犬の草子」等の類似詞章の引用がある。『犬の草子』には「朧わらばべの

小うたなり」とある。

注2 「昔話の周辺」国語通信一六六号

II その他

衣服の色と宝（金錢）の種類について、「靈怪錄」「續神錄」にある記事に着目したと話すと、「西陽雜俎」も見るとよい」と示唆された。折りよく日本では訳本が刊行されつつある。

。その後、林蘭女史編の『蒼仙壳雷』の訳書「雷壳りの董仙人」（創元社）を読んでいると、「人の運命」という題の話で「宝化物」そっくりのエピソードにぶつかった。雑誌「ITAN」四十九年九月号に花咲一男氏が紹介された式亭三馬の合巻「力競椎敵討」には、昔話「繼子と母」の趣向がとり入れてあつた。

。版本「あつめ草」をくつてみると、心学の本であるが、昔話「打出の小槌」……例の米倉が絵入りで載っていて、「打出した子免くらよりはおとりけり 欲に眼の見へぬおやじハ」と歌が添えてあつた。

。昔話と直接の関係はないが、よく話題になる枕草子の「冬の月」がへ師走の月と老女の化粧けがわとは冷まじきものと（清少納言枕草紙）として「たとへづくし」P.516に記載されている。

。五月、中国の学者に会つて、昔話「宝化物」中の化物の

管見の狭いまま書き記したので諸先学の論考に就いて参考することも少く、妄説に過ぎぬかとの不安を抱いてい

る。特に芭蕉の句についての感想は独断そのものであろう

し、また、「だとへづくし」の各項については、続巻を十分に参照できぬ忽卒の指摘であり、既に論じられたであろう項目も確かめえぬまでの記述であることをお詫びし、ご拙正を仰ぐことにさせて頂く。

(八十一 年十月三十一日記)

(市立岡山商業高校勤務・「日
本昔話通観」編集委員)

研究室受贈図書雑誌目録Ⅶ

- 日本文学ノート 第十四号、第十五号、第十六号（宮城学院女子大学）
- 日本文学論集 第三号（大東文化大学大学院）
- 日本文学論稿 第十号（東北大学文芸談話会）
- 日本文芸学 第十五号、第十六号、第十七号（日本文芸学会）
- 日本文芸研究 第三十二卷第三号、第三十三卷第三号（関西学院）
- ノートルダム清心女子大学紀要 第五卷第一号
- 俳句文学館紀要 第一号（俳人協会）
- 梅光女学院大学文学部紀要 16
- 花園大学研究紀要 第十一号
- 藤女子大学国文学雑誌 28
- 富士論叢 第二十六卷第一号（富士短期大学）
- 文学研究科論集 第八号（国学院大学大学院）
- 文学研究稿 第三号（文学研究稿の会）
- 文学史研英 21・22（大阪市立大学）
- 文学論輯 第二十七号（九州大学）
- 文学論叢 第六十五輯（愛知大学）
- 文学論叢 第五十五号（東洋大学）
- 文芸研究 第九十四集、第九十五集、第九十六集、第九十七集、第九十八集（日本文芸研究会）
- 文芸と思想 第四十五号（福岡女子大学）
- 文芸と批評 第五卷第四号、第五号、第六号（文芸と批評の会）
- 文芸論叢 第十五号（大谷大学）
- 文献探求 7・8（九州大学文献探求の会）
- 文研論集 第七号（専修大学大学院）
- 文莫 第六号（鈴木聰学会）
- 文林 第十五号（松蔭女子学院大学）
- 方言研究年報 続六（広島方言研究所）
- 武庫川国文 第十八号（武庫川女子大学）
- 百舌鳥國文 第一号（大阪女子大学大学院）